

## 要旨

**研究目的** 精神科病棟での勤務を経て地域で働く看護師が、病棟から地域へとケアの場を移行した後に体験する変化のプロセスと困難の内容、その体験に影響を与える要素、および困難にどのように取り組んでいるのかを明らかにし、精神科看護教育への示唆を得ることである。

**研究方法** 本研究のデザインは Grounded Theory Approach の継続的比較分析法を用いた、質的記述的研究である。対象者は精神科病棟での勤務経験を経て現在地域で働いており、地域での勤務年数が1年から5年未満の看護師7名であり、半構成的面接によるインタビューを行った。インタビューでは地域へと移行後に体験した具体的な困難について回顧的な語りを得た。データ収集期間は、2011年2月から2011年7月であった。データの取り扱いに関しては個人情報の保護を厳守し、参加協力に関しては研究対象者の自由意思の尊重に努めた。研究のすべての過程において、精神看護の専門家および質的研究者である指導教授に継続的にスーパーバイズを受けた。

**研究結果** 分析の結果、精神科病棟での勤務を経て地域で働く看護師の体験と困難への取り組みのプロセスについて、次のことが明らかとなった。

変化のプロセスを表すカテゴリ、変化の内容を表すサブカテゴリ、サブカテゴリを構成する具体的な現象がそれぞれ抽出された。変化のプロセスは、自由度の高い患者に出会って、それでも問題を見つけようとしてしまう・自分の主導では変わらない現実を受け入れて、患者の基準に合わせようと努める・親密になり過ぎないように、境界を調整し直す・患者の生活を続ける力を信じて、手を出さずに見守る、の4段階であり、コントロールできるという意識を手放すというコアカテゴリに統合された。

変化の具体的な内容は、問題解決志向の視点から強みを見つける視点への変化、看護師主導の関係性から患者主導の関係性への変化、患者との関係性における境界の再調整の3点であった。

問題解決志向の視点には、看護過程を中心とした看護基礎教育と臨床実践が影響していると考えられ、今後の現任教育ならびに看護基礎教育において、メンタルヘルスの回復を主眼においた看護理論を取り入れていく必要性が示唆された。